

昭和二十五年七月二十三日  
 和五十四年十月十五日  
 發行三種郵便物認可  
 (毎月一回・十五日發行)

(通第三一六号)

# 慈

# 光

第二十七卷

第十号

久遠の友……………	念仏詩抄……………	いのちのよろこび(二)……………	一つの告白……………	『青蓮華』歌抄(二)……………	流念法海……………
花田正夫……………	木村無相……………	高千穂徹乘……………	松本解雄……………	白井成允……………	池山栄吉……………
(20)	(17)	(12)	(10)	(7)	(1)

(信後雜感)

# 流 念 法 海

(信 後 雜 感)

## 池 山 榮 吉

さればただ一つなり

「一人居て喜ばば二人と思うべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり」私達は聖人とともに喜ばしていただけるばかりでない。その喜びの湧いて出る源、信心そのものについて、聖人のそれと私共のそれと、すこしのかわりもないのを確信することが出来る。

「源空が信心も如来よりたまたわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまたわりたる信心なり。さればただ一つなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらざる浄土へは、よもまいらせたまひそうらわじ」と何ときびきびした文句ではないか。他力信心の一大特徴はここだ。

「大願清浄の報土には品位階次をいわず。一念須臾のあいだに、速疾に無上正真道を超証す」

私達はその智慧、善悪を超越した一味平等の待遇に、一面恐縮にたえないと同時に、他面云いしらぬ満足を感じずいはいはにられない。

心 絃 諧 調

「哀れなるかな、恩顔は寂滅のけぶりに化したまうといえども、真影を眼前にとどめたまう。悲しいかな德音は無常の風にへだたるといえども実語を耳のそこのこす」

七百年の星霜をへだてながら、親鸞法然の両聖人と一坐して、心絃(しんげん)の階調を感じる事の出来るのは一つには如来からたまわった同じ信心のおかげだ。

「さきに生ぜんものは後を導き、後に生ぜんものはさきをとぶらひ」相たずさえて同じ光を仰ぎ、同じ泉に汲み、同じ蔭に憩い、同じ道を辿(たど)る。その唯一の合言葉は同じ念仏のほかにない。

恋しくば南無阿弥陀仏をとなうべし  
われも六字のうちにごそすめ

俱会一処(くえいしつしよ)

「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来世の悟りの前の縁を終ばんとなり、われおくるれなば人にともなわ

れ、われさきだたば人を導かん」

亡き妻が不治の病にかかって、それとされたとき、悲歎のなかからうれしさの身にもあまるを覚えたのはこの御文であった。「樂しきはじめおもうごと、哀しきおわりたえがたし」やがて幽明境をへだても、心と心とは永久に結びつけられて、浄土の対面を期することが出来たからであつた。

無 別 道 故

「同一に念仏して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海のうちみな兄弟なり」

世々生々の父母兄弟なる一切の有情は、一心帰命の一念に、同じ御親の愛子(まなご)として、永久かわらぬ精神の上の兄弟となり、会者定離の相對界の理法を脱して、俱会一処の絶対界に、この世ながらの志願を実成することが出来る。現に親子たり、夫婦たり、兄弟たり、朋友たる人の間に、現当二世の結縁が確認された暁は、独来独去の心淋しさもおのずからうすらいで、有漏(うる)の穢身をそのままに、ともに浄土にすみあそぶおもかげさえもしのばれよう。

安樂仏国にいたるには 無上宝珠の名号と  
眞実信心ひとつにて 無別道故ときたまう

還相廻向(げんそうえこう)

「お前に御信心がいただけなければ、親子といつても此世だけのこと、あの世で一緒になることは出来ない。だから是非御信心をいただいて、御浄土にまいれるようにしないではいけない。私はさきに行つて待つてゐるから。しかしどうしてもいただけなければまあそれでもよい。私が仏となつたら衆生済度に出て、よしお前がどこにどうしていようと、一番にお前を救い取つてあげようから」

亡き母が私の子供の時分、よくこういわれたのが、未だに耳の底にのこつてゐる。私はどれだけ此言葉にひきつけられたかわからない。まだ信仰がぐらついて、如来が隠見出没していた頃、大分信的傾向から遠のいた矢先、この言葉をおもひ出しては、にわかにあともどりをしないではいられなかった。

今更おもえば亡き母は、如来の御使いとして私に信仰をすすめ、かつは還相廻向の確信から、未通りたる浄土の大慈悲心をもつて一子のために尽して下さつたのであつた

往相廻向の大慈より 還相廻向の大悲をう  
如来の廻向なかりせば 浄土の菩提はいかがせん

弟子一人ももたず

信仰はわがはからいで得られるものでない。むしろ如来

他力のはからいでわがはからいのやんだところが信仰なのだ。わが力で獲られるものでない信仰は、またわが力で人に与えられるものでない。それだから真に獲信の体験のある人には、わが感化で人に念仏をもうさせようなどという考えのおこるはずがない。

聖人が「親鸞は弟子一人もたずそうろう」とか「如来の教法を十方にとききかしむるときはただ如来の御代官をもうしつるばかりなり。さらに親鸞めずらしき法をひろめず、如来の教法をわれも信じひとにもおしえきかしむるばかりなり。そのほかはなにをおしえて弟子といわんぞ」と仰じやったのは、ほこらしくきこえるのをきらって、ことさらに卑謙な言い廻わしをされたのではない。真実内心の確信をそのままうちあげられたにすぎない。

歎異抄二章の終りに「この上は念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんとも面々の御はからいなり」とあるのは、一寸見ると「自分はもう言うだけのことは言ってしまった。この上はどうしよう」と諸君の勝手だ、自分の知ったことじゃない」といったような、すこぶる冷淡な言い方ときこえるが、これもその実、信仰はひとえに如来の御催しによるという確信から出てくる虚心坦懐な態度に外ならない。平素信者の間に立ちまじわって、御同朋、御同行と呼ばれたのも、やはり同じ思想のあらわれと受取れる、

祈祷の意味が念仏の中に打ちこまれるのは、まだ本統の信心がただけていないしるした。

### わらといね

「まめやかに浄土をもとめ、往生をねがわんひとは、この念仏をもて、現世のいのりとおもいうべからず。ただひとすじに出離生死のために念仏を行すれば、はからざるに今生の祈祷ともなるなり。これによりて藁幹喻経といえる経のなかに、信心をもて菩提をもとむれば、現世の悉地（しっち、種々の利益）も成就すべきことをいうとして、ひとつのたとえをとけることあり。たとえはひとありて、たねをまきて稲をもとめん。また藁をのぞまざれども、稲いできぬれば、藁のずからうるがごとしといえり。稲をうるものは必ず藁をうるがごとくに。後世をねがえば必ず現世ののぞみかなうなり。藁をうるものは稲をえざるがごとくに、現世の福報をいのるものは、かならず後世の善果を得ずとなり。経釈ののぶるところかくのごとし」持名鈔

### 衆禍波転

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに、衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破して、速

他力の信心うるひとを、うやまいおおきに喜べばすなわちわが親友そと 教主世尊はほめたまう

### 一人々々のしのぎ

「如来の教法は給じて流通物（るずうぶつ）」だが、信仰は、一人々々のしのぎだ。念仏は自分のすくわれたありがたさに、内の思いが口に出て声となったもの。それ以外に何かの意味が寓されていたら、その念仏は怪しいものだ。「親鸞は父母孝養（ぶもききょうよう）のためとて、一遍にても念仏もうしたることいまだそうらわず」とあるのは、自然そうなるので、そうした考えのおこるのをしりぞけて、わざと念仏と没交渉にされたのではない。

これにつけて省みさせられるのは、私が、母の生存中、歎異抄を読むたびに、いつも母を側に呼びながら、今日ひとつ母のために読んできかしてあげようと思ったことが一遍もなかったのは、孝行心のない私のことだから、そうあっても不思議はないのかもしれないが、それにしても余り変だと、われながら不審にたえないことであったが、ひよっとしたら、前と同じ理由にねざしていたのではなからうか。

追善のための念仏があり得ないとともに、同様の理由で現世の利益を祈る意味の念仏もまたあり得ない。追善や

に無量光明土に到り、大般涅槃を証し、普賢の徳に遵（したが）う」

亡き妻が、娑婆の終りを前にみて、大悲の矜哀に生きたとき、至徳の風静かに、衆禍の波転ずということをも、しみじみ味わわせていただいて、光明の広海に浮かびぬる身のしあわせを深くよるこんだことであったが、これも一時、かれも一時、無明長夜の闇は無碍の光明に晴れながらも、煩惱の黒雲はまだ信心の天を覆うて、法性の覚月のあらわれるとき、涅槃の境にあこがれもせず、曠劫流転の苦惱の旧里にばかり恋々としている。これが私達の平生だ。

煩惱にまなこさせられて 撰取の光明みざれども  
大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

### 悲哉愚禿鸞

「悲しいかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の数にすることを喜ばず、真証の証に近くことをたのしみます。恥ずべく傷むべし」

聖人は、私達の言わずにいられないことを、前もって言っておいて下さる。

「さればかたじけなくもわが御身にひきかけて、われらがみの罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるをおもいらせんがためにそ

うらいけり」

聖人はお感じのままを述べさせられても、それがそのまま私達のおさとしときこえる。しかも一々私達と同じ立場に立たせられて仰言るのだから、たまらなくありがたく、また云いようなくたのもしく感じられる。

### 親鸞もこの不審ありつるに

同様のお感じを唯円房の問に対して述べられたのが、歎異鈔第九章で、これこそ実に信後生活の基調として、ことに拝戴すべく、希有最勝の華文として、もっとも誇るべきものの一っだ、

「念仏はもうしますものの、それにつれるよろこびの情はいいかげんなものでございまして、とても踊躍歡喜などという飛び立つほどのうれしさも感じませんし、また速くお浄土へまいりたい、というかんがえも一向ございませぬのはどういふものでございましょう」と唯円房のおたずねしたところは、そのまま私達のおききして見たいところが、聖人がそれに対して、

「それは親鸞にも合点が行かなかったところであつたが、唯円房、そなたも同じおもいであるな」

と仰言つたのは、何たるさばけた同応の態度だろう。飽くまで見捨てぬ如來の慈悲を、無意識的に体現されたもの上に移されたような、何とも云えない楽々とした気分になつて難思の法海のどん底まで徹到せしめられずにはいられない。

### 力なくして終るとき

私達の日ぐらしは、畢竟この問願を事実の上に反覆してゆくのだから。心を弘誓の仏地に樹てられたありがたさ、念は難思の法海に流れてゆく。

いそぎ浄土にまいりたい心のないのおなじわけで、煩惱に後髪をひかれても、娑婆にとどまる縁がつきて、力なくして終るときには必定かの土にまいらせていただけのので、いそいで行きたい心のないものを、ことにあわれとみなされるのだから、大悲の大願はいよいよたのもしくおたすけは間違いないと受けとられるのだ。

さて最後に「踊躍歡喜の心もあり、いそぎ浄土へまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんとあやしうそうらいなまし」と仰言つたのは、へだて心のやまな私達の逃げられないように、垣をめぐらし、袖をひかえられたかたちで、いかにしづとい私達でも撰取不捨の周到さに、ただ茫然としてあきれずにはいられなくなる。

五濁悪世の有情の 選択本願信すれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみてる

といただける。

「しかしよくよく考えて見れば、天に踊り地に踊り、手の舞い足の踏むところもならないほどに、よろこぶべき筈であることを、よろこべないので、いよいよもつておたすけにあずかることは間違いないと思うたがよい」

とは意外も意外、敗軍の将が軍法會議にまわされるものと覚悟をきめていたのに、金鵄勳章、功一級を賜わったよ、うな、これは聞きがちではないかと、わが耳を疑いたいくらいの沙汰としか思われぬ。

それになおつづけて「一体よろこぶべき筈のころをおさえてよろこばせないのは、自分に煩惱がつきまといるせいである」といかに成程とうなづかれる断案をお下しになって、さてまた「ところが阿弥陀仏におかせられては、このことを前もってお見抜きになつていられて」との仰せに、ハッとある暗示を与えられたような氣持になつたところへ「私達を指して、煩惱にかけては何一つ不足なく具わつてゐるおろかもと仰せられたことであるから、大慈大悲の撰取の本願（おちかい）はこうした私共のためであつたのだということが会得されて、ますますたのもしくおもわれるのである」と、かゆいところに手がとどくといおうか、隅からすみまでゆきわたつたおさとしに、あたかも居心地のわるい砂利の上から、ふうわりした羽根蒲団の

如來の作願をたすぬれば 苦惱の有情をすてずして  
廻向を主としたまいて 大悲心をば成就せり

### 力ある時にきいて

人間忽々（そうそう）として衆務をいとみな

人命の日夜に去ることを覚えす

燈火の風中に滅する期しがたき如く

忙々たる六道定趣なし

未だ解脱して苦海を出ずるを得ず

云何が安然として驚懼せざらんや

各強く健かにして力ある時に聞きて

自策自勵して常住を求めよ

私の貧弱な信の実験を、臆面もなくさらけ出して、世のものわらいとなるのも恥じないのは、まだ他力の信に徹到しない人々に、強く健かにして力ある時にきいて、力なくして終るとき用の意がしてもらいたさに、参考の一端にもとおもう婆心にすぎないのだ。

ともしびの用意かしこし秋の暮

心ある人は、貧者の一灯ともゆるしてくれよう。



『青蓮華』歌抄(二)

白井成允

○ 歌よめば悲しかりけり悲しみの跡なき歌をよまん日はい

つ 悲しみを内におさめて朗らかに生きゆく人の雄雄しさも  
がな

胸のうちにしつこき怒り潜みをりいつか焰と燃えん日を  
おそる

○ おほらかに心たもてと告りましし亡き師の教え思い出に  
けり

○ 大学を去る日の近み想ひ出の講義をせんと願ぎつつ来し  
を

際涯(はてし)なき暗夜に迷ひこしわれを仄(ほの)か  
に照らすおん光明(ひかり)かも

○ わが病由り来る源(もと)を溯(さかのぼ)り溯りても  
尋ね知られず

り 病む時は病むがよしとて良寛の歌を誦しつつ時を経にけ

ゆ 児を抱く母のまなざしよ天地の光をあつめかがやきて見

いつしかに美術をさぐる念ひもてみ仏の前に立ちをりわ  
れは

○ このみ仏造りまつりし工匠のみたまやいかに清くましけ  
ん

○ いくししみみちたらひてぞものみなをとこてらしますすな  
むあみだぶつ

つみのままきよきみににめされゆくおほきよろこびな

臨終しやうねんの正念期こころする意こころなりあな愚かしきわが心かな

○ ……浄住寺にて…  
久しくも願ぎこし境静かなる林にありて鳥をきくかな

○ 草も木も鳥も岩巖秀(いはほ)も声あげてみほとけを讃ほぐ  
この境かも

まなかひの限りは青き竹林遙かなる世に見し青さかも

○ み仏の恵みの鞭むちのなかりせばわが僂慢たかぶりをいかで知らまし

○ 慚あはれづること知らぬ身故にみほとけの呼ばせたまふを蔑  
(おろそか)にきく

○ おろそかに聞けど仏の御名告りわが髓きに入りわが血に流  
る

むあみだぶつ

古稀こきに入る

○ 古は稀こきなりしてふ歳としに入りいつの日までのいのちかとお  
もふ

○ いつの日に死なんもよしや弥陀仏のみひかりの中のおん  
いのちなり

○ 弥陀仏の御名称へつつひとひひとひけふを吉きき日といそ  
しみまつらん

り 善根をたちたる身ゆゑ善業を積まんとすれと空しかりけ

○ 善根をたちにし子そとみそなわしみ親はわれに添そひて離  
れず

○ 善根をたちにし身ぞと知らずして久しくわれは迷ひこし  
かな

○ みほとけのみちかひきけばひとのよのこころしき山もこゆ  
るたのしみ

みほとけの誓の露の滋ければ醜の小草に妙の花咲く

あれをせんこれをせんとして何一つなしえで朽ちんこのいのちかや

七十路の懈慢の罪よ弥陀仏の御名を聞きつつあはれ懈慢べし

わが齡七十年にみちし朝夢にあれまししわが母上かも

いきしにをかけて手術を受くる日はやくこよとやおそくこよとや

一月をここにすごさば病いえて帰宅し得んと医師は云えども

あさましきわがこしかたはみほとけのしらせたまへばなにをなげかん

手術のとき心を法に転せんと歎異の文をそらんじ誦する

## 一 つ の 告 白

信の門に入る一つの障害は、自己の本当のすがたを知らないからである。或は学問に、或は芸術に、或は才智に目をくらまされて、何時の間にか驕慢におちいつて居るのである。私がかつて蹉跎したのも実はそのためであった。

真宗の教は「雑行雑修のころをふりすて」とあるが、私にとってどうしても合点がいかなかったのである。何故に我々が各自の根機に依じて、たとひ貧者の一灯なりとも、人のため世のために尽くすことが仏への道行きにさまたげになるのであろうか。幼い時から、善いこと、正しいことをせよと教えられ、又そうすることが人間たるもの当然なすべきことであると信じて居った私にとって、こうすることが仏の教と相容れないとあっては、遂に行く手は閉ざされてしまう外はないのである。何とかしてこの疑問を取り去ろうとするけれども、考えれば考えるほど疑問はいよいよ疑問を生じて、胸のわだかまりは次第に増して行くばかりである。

たまきわるいのち幸あり弥陀仏のみめぐみかふりゆきつかへりつ

みちのくの山河みれば若き日の事しのばれて懐しきかな

夏草をつはものどもの夢のあとと見たる翁が夢のあとかも  
(芭蕉翁)

三代の栄華のあとを語りつつ山河は今も昔のごとし

いとふかきみのりをききてうたがひもおそれもあらず、や  
すくしなやか

おほみのりほめたたえつつおのづからめぐりめぐりてさ  
とりにいたる

出勤の電車の中に席ありて仏の言葉よむがたのしき

みほとけの言葉をよめばあなかしこ心すがしく晴れわたりつつ

## 松 本 解 雄

こうしていろいろうちに人生苦、世間苦の数々は私の身邊に否応なしにおおい来って、はては暗黒の真只中に迷う憐れむべき仔羊となったのである。しかしひるがえって考えて見ると皆これ自己に対する認識不足から来ているのである。自己はたして塵ほどでも善と名のつくものをすだけの力を持つているだろうか。手近かなところから云うても現に親兄弟を悲しませ、多くの人々に様々な難儀と厄介とをかけ通している自分ではないか、若しも初め考えていたように善を行い得るならば、もっと周囲の人達に対して満足と安心とをしてもらえることが出来るはずである、否それよりも肝心な自分自身をもっと幸福にさせなければならぬ。

善だとか、正義だとか云うても、それは単なる口先ぎだけにはすぎない。一体私にとって真の善が何であるかさえわからぬのである。親鸞聖人の所謂「善悪のふたつ、総じてもて存知せざるなり」である。それなのにおこがましくも

善が出来るの、正濱を歩むだのと思つてゐるのだ。実にしてみよのない愚かな者であつたのだ。その愚かな自分を失うてどうして正しい道が歩かれよう。あたかもこわれた自転車運転しようとしているのと同じことである。虚偽から虚偽へと同じ迷いの路上をグルグルと、愛憎悲喜の情を抱きながら馳せつづけているのである。この迷妄の私が如來の智慧のおひかりによつてはつきりとそのありのままのすがたを照し出されたとき、今までの自分の考え方というものが、正に顛倒の妄見であつたことに気付かされるのである。

私は今、まざまざと如來の呼び声に接したときの感激を思い出すことが出来る。お念仏さえ出なくなつた私に、

「如來は久遠劫来お前を待つて居たのだ！」

と私の心の奥底にひびいた時、

「全く私如き罪深き、愚かな者はなかつた。私は間違つていた。すまなかつた、有り難うございました」

と我を忘れて如來の御前に五体を投げ出して、懺悔感謝の涙に泣きくれたのである。

今まで、何でこのように不仕合せなのか、何でこのように人は冷たいのかと、只々歎声の中に過して、ひたすら魂の淋しさをまぎらわすことだけに腐心していたみなしごの私が、暖い暖いみ親のふところに抱きとられたのであつたここに立つてふりかえると、身の不幸も、世の荒波も、

## いのちのよろこび (二)

### 高千穂 徹 乗

私どもは平生、丈夫な身体で働らいてゐるときは、あたり前のように思つていますが、ひとたび病氣になつてみると、元気で働けることがどれほど、しあわせなものかがわかるのであります。私はこのたび喉頭をとり除く手術をうけてすっかり声が出ないようになりましたが、いよいよ声が出なくなると、声がでて榮に話ができるということが、どれくらい大きな幸福であるかがわかつてまいりました。

このように、私どもは人生の苦難や悲しみに直面して、はじめて自分の生き方について深く考え、生活のあり方について、真剣に思いなやむようになるものであります。私どもが自分の苦難を機縁として、深くみずからのすがたを反省するとともに、永遠のいのちの問題について探究しようとする意欲がうまれるならば、悲しい苦難を縁として、自分の進むべき道に、新しい天地がひらかれることになつてあります。

先年刊行された「愛情は降る星の如く」という書物は、

思えばこの罪深いおろかな私を呼びさますみ親の慈愛の御方便であつたのだ。私の魂は一時に点火して、暗黒が光明に転じ、歎声が感謝に変じたのである。そして今こそあきらかに「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」と信じて念仏もうさんとおもいたつ心のおこる時、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめ給うなり」の御文がはつきり了解することが出来たのである。

すべてそらごとたわごとで、善だとか悪だとか、正だとか不正だとか、なまはんかな道徳的な興味が獨りして、一かどの道徳者らしい顔をしたとてそれが何になるうか。貧者の一灯など自己弁護的偽善の辞をならべる前に、私自身の脚下を今一度ふかく見直さなければならぬ。「言うは易く行ふは難き人生の実相よ」という哲人の言葉に耳をかたむけなければならぬ。

はじめ難行難修をふりすてることに行きつまつて居た私は、実に大それたいたずらものであつたのだ。「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきに」との仰せをほんとうに聴き得なかつたのだ。

「邪見驕慢の悪衆生、信樂を受持すること甚だもつて難し、難中の難これに過ぎたるはなし」とは私の事である。私はこの聖語を味いつつ同信の友を憶念して擱筆する。

(聖鸞寮誌第三号より)

ゾルゲ事件に連坐して刑務所に服役中、死刑の宣告をうけた尾崎秀実が、その妻子におくつた手紙を集録したものであります。尾崎氏は死刑の宣告をうけて、近づく死と対決し真剣に苦しみぬいて、ついに宗教の信念に徹し、死刑の日まで、生きる喜びをもちつづけ、みちたりた心で一日一日をすごしたのであります。彼はその妻におくつた手紙の中に、次のように記しております。

私にとって要するに、人がたまたま生をうけたこの現世において、まず生命の不思議をハッキリと納得した安心の上に立つて堂々と、しかもたのしく生き来り生き去ることに、すべての意味があると思う。永遠の生命は実にこのようにして現世を力いっぱい生きぬくことのように存在すると確信する。こういへば至極簡単なようにきこえるが、実はなまやさしいものではない。このためには、何よりも先ず生死の問題について、これを超克(ちようこく)しなければならぬ。

尾崎氏は生死の関頭にたつて、自己と人生の実相をはつきりとみつめ、真剣に生死の問題ととりくんで、はじめに生死をこえ、真に生きがいのある新天地を開拓したのであります。

○ 浄土真宗の開祖、親鸞聖人は、私どもすべての人間に強く正しく生きぬくことを教えられました。聖人はさまざまに苦しみにたえ、いろいろな不幸にうちかち、そこから立ちあがって、強く生きぬかれたのであります。どんな悲しみや苦しみに追いつかれ、自分が歩まねばならぬ道を見失うことなく、自分の正しさを信ずる力をなくさずに、あくまでも真実にむかって進んでゆかれたのであります。そして親鸞聖人をしてこのように悲しみや苦しみに打ちかたしめたものは、はたして何であつたでしょうか。すべての草も木も、光にむかって芽をのびし、花をひらくように、生きとし生けるものはすべて、光を慕うていきのびるのであります。なぜならば光りは生命を育てる母胎であるからです。およそ光りには明るさと暖かさとをそなえております。その明るさは闇をひらく知恵であり、暖かさはすべてを生かす慈愛であります。まことにこの知恵と慈愛こそは、すべてのものを生かす力なのです。生きとし生けるものすべてを救わんと誓われた仏さま

え、朝夕に礼拝することを忘れてはなりません。

○ 仏壇のない家は、どんなに立派なものでも、それは窓のない牢獄のようなものであります。仏壇は聖なる光が流れこんでくる窓であつて、この窓を開くと、おのずから清らかな光が流れこんできます。私たちは愛欲の心に眼がくらんで、仏さまのすがたを見ることはできませんが、仏さまの大慈悲は常に私を照護したまうのですから。晴れた朝も曇る夕べも、一家うちそろって礼拝し念仏すれば、清らかな慈光に浴し、ゆかしい香りに染まり、次第に私たちの心は美しく伸びてゆくのであります。

○ 私病気の治療のため手術をうけて、声を失ってから二十六年の月日を無事にすごしました。無事といつても、それは平安な道だけではなく、山もあり坂もあり、晴れた日もあり嵐の日もありました。しかるに私は多くの人と物との温情と恩恵とによつて、生かされて生きてきたことを、しみじみとありがたく感じております。更に今日まで生きながらえたおかげで、いよいよ深く仏さまの広大な慈悲を領受することができました。

○ この頃のような動乱転変の世相に対処して、正しく強く明るく生きぬくことは容易なことではありません。しかし動転しているのは社会の情勢だけではなくて、実は私自

は、かぎりない光りと、はかりないいのちをもつて、その仏身を莊嚴せられ、阿弥陀仏と名のられたのであります。私どもはこの阿弥陀仏に帰依し、信順することによつて、迷いを転じて悟りをひらき、闇をとおして光にふれることができるのであります。

○ 南無阿弥陀仏の名号は、かぎりないのち、かぎりない光をそなえた仏さまの徳をたたえたものであります。親鸞聖人は正信偈のはじめに、

南無無量寿如来……うけよ生命（いのち）

南無不可思議光……あおげ、み光り

と讃仰せられました。聖人をして、生涯の苦しみにうちかたしめたものは、仏さまの願力によつて恵みあたられた信心であります。

○ 仏さまの御名をとなえる念仏の聲は、暗いあきらめの歎きであるように誤解されていますが、この讃仰のしらべこそは、世のさまざまの順縁と逆縁とをこえて、力づく生きぬく活力素であります。私達は明るい生活の糧（かて）として、いきいきとした生活の泉として、力強い勇みの念仏を称えるように工夫（くふう）したいものであります。

○ 私たちが明るい生活をもとめるならば、日常のひぐらしにおいて、仏さまに近づき親しむことが必要であります。これがためには、各自の家庭に仏壇を安置して香花を供

身が混迷動乱のかぎりをつくしてきたのであります。私は長い年月のあいだ祖師のおしえをいただき、聖教の鏡に、自分のおろかなすがたを見せられて、私の人生航路にも、何となく心のうるおいとゆとりとを感じ、老境をたのしむ心さえわいてきたようであります。

○ 私が今日までの七十五年の生活で知りえたことは、人の世のむなしさと、人の心のにくささとでありました。そして私はこのむなしさと、みにくさとを掘り上げて行くことによつて、仏さまの本願という清らかな地下水につきあたつたのであります。

○ 仏さまの大悲は、私の無明煩惱のやみの奥深くを照らす光であります。この光によつて煩惱がぼんのうと知らされ、そこから無明のやみに、ほのかな光がさしてきたのであります。そして私が仏さまの心光のなかにあることに気づいたのであります。

○ かえりみますと過去七十余年の私の生活は、すべて尊い御恩の中の日ぐらしでありました。病後二十六年の生活をふりかえつてみても、私は同信同行の人たちのあたたかい心につつまれて、今日にいたつたのであります。まことに念仏の心に結ばれた友情ほど深くして強いものがこの世にあるでしょうか。よろずのこと、そらごと、たわごと、まことのない、この世のなかに、仏さまの慈悲のみが、まこ



との光りであり力であります。悲しい宿業によって、私は一声の念仏さえ称えることの出来ない廃人となりましたが、静かに合掌して仏さまを仰ぎますと、いよいよ強く、その招喚のみ声を、身ぢかに聞くことができるようであります。

私はこのたびの病気によって、ふかく自分の宿業というものを感じることができました。私たちは一人ひとり作業報のありだけをさらけださねば、死ぬにも死ねないものであるように思われます。この世の人達は、みんな各自がになわねばならぬ業苦をにないながら、日ぐらしをつづけているのであります。まことに業苦とは私自身が、いやでもになわねばならぬ重荷であります。荷物といえは、すくにも肩からおろされるようですが、この重荷は私が、かっいでいる荷物ではなくて、実は私自身なのであります。

罪や悩みや、分別やはからいなど、これらはみな我執と我見と我慢とによってうまれたもので、すべては私の「我」にもとづくものであります。しかるに私は自分の我性に気づいても、むしろこれをかくそうしたり、ごまかそうとしたりして、いつまでも「我」に執着しているのであります。かように「我」に執着することが、私の生れつきの根性であるかぎり、私はいつまでも我をたのみとし、我をた

念仏とは私が仏さまを念ずることではなく、仏さまにいつも念ぜられておることあります。私は声を失って二十六年、近年は視力もおとろえて不自由なことでありますが、年をとるにつれて、さびしく思うことは、声にだしてお経をよみ、お名号がとなえられぬことであります。私のような業さらしものはないと思いますが、私は身体が不具になっても、心まで片輪になつてはならぬ、姿はみにくくとも心までひがんではならぬと、自分自身に申しさかせて心のかでお念仏をよるこび、いのちの限り分に応じた報謝をさせていただきたいと願っております。

私たちのまわりには、いろいろな悲しい不幸がみちております。このような社会において、苦しんでいる人のために、できるだけちからをつくす人が、ひとりでも多く出られたら、私たちの社会はそれだけ住み心地のよいものとなるわけでありませう。さらに私ひとりが生きていることによつて、たとえ少ない人でもよい、その人の生きてゆくための力となり光となるようなことがあれば、どんなにうれしく生き甲斐のある人生でありませうか。

わたしたち一人一人の心にとまされた信仰の光は小さくとも、それが千となり万となつて、広がってゆくとき、私たちの社会を明るくし、世界の平和をもたらす大きなとしびになるわけでありませう。

昭和四十九年四月八日。

(熊本市京町二丁目、仏蔵寺住)

よりとして居りますから、我を捨ててやることはできないわけでありませう。

しかるに私の知恵や学問や権力をもつてしても、どうにもならぬギリギリのところゆきつまつて、私のたよりとし、たのみとしていたものが、みんなむなく消えうせて、私の分別やはからいが打ちくだかれる時、私は自身身を投げだすよりほかはないのであります。

されば、そくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよとさけばれた親鸞聖人のおよるこびは、凡夫のすべての業苦を仏さまにまかせ、重荷をおろして楽々とした救いの境地を示されたものであります。まことに私たちは一人一人の宿業に泣かねばならぬものであります。その悲しい宿業に泣いた涙の下からも、ニコリと笑うことの出来る人は、しあわせな人であり、めぐまれた人であります。

私たちは常に仏さまに護念されるゆえに心は安らかに、また常に仏さまに見られているゆえに、おそろしいのであります。安らかであればあるほど、自分を責める心が深ければ深いほど、安らかな喜びがめぐまれる。手をあわすのも仏さまの慈光のなかにあり、おめぐみをわすれがちな私がおぼせんと気づくのも、仏さまの心光のなかであります。「ありがとう」と、「すみません」このふたつの心が、私たちの信心のすがたであると共に、またこの心が、私達の日常生活をうるわしくする要素でもあります。

### 学問と信仰

福島 政雄

学問も本当に深く研究して行けばどの学問でも限りのないものだということがわかって来ます。自分の知識が有限微小のものであることがわかって来ます。私も六十歳を超えてからこの事が少しわかって来ました。自分は今までに何をやって来たのか、色々の書物の内容をつずりあわせて来ただけではないか。こんな疑問が私の心に起ります。自分の生命から流れてつきぬ学問の泉というようなものが出来ているのか、かう考えますれば、私も今日ようやく学問によって自分の無知無能を知ったということがわかります。お念仏は私のための最上の法にいたします。ということもわかりませう。学問を空することによって信仰が明らかになり信仰が明らかになることによって学問への執着が無くなりそれと同時に学問が潤わされて来ることを感じますのであります。

念 (和) 仙 詩 抄

信者はお一人  
ナムアマミダブツさま  
お一人  
わたしは信者に  
念じられている者  
ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツと  
念じられてはいる者  
唯除五逆誹謗正法  
ただひたすらに  
逆謗を除かんと  
念じられている者  
わたしは逆謗者  
信者はお一人

木 村 無 相

お一人 お一人  
ナムマンダブツ  
ナムマンダブツ  
常に呼びかけ  
ナムマンダブ  
ナムマンダブツと  
常に呼びかけ  
たもうなり  
わたしが称えても  
称えいでも  
常に呼びかけ  
たもうなり  
わたしの煩惱の  
ただ中で

常に呼びかけ  
たもうなり

常於大衆中

説法師子吼

常に呼びかけ  
たもうなり

ナムマンダブツ  
ナムマンダブツ  
ナムマンダブツ  
ナムマンダブツ

お 声

お声がかかった  
上からは  
逃げかくれても  
おなじこと  
お声の中から  
出られない  
お声にこもる  
おんまマコト  
いただくほかに

道はない

ナムアマミダブツ  
ナムブツと

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ

乗せて必ず

船 船 船

弥陀・観音・大勢至  
大願の船に乗じてぞ  
生死の海に浮かびつつ  
乗せて必ず渡しける

ナムアマミダブツは  
大願の船

ナムアマミダブツと  
たのませたまいて  
乗せて必ず渡しける

ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ  
ナムアマミダブツ



その時に

ナムアミダブツ

ナムアミダ

念仏もうす

その時に

願の不思議が

感じられ

ホントのわたしに

遇うのです

煩惱具足の

そのわたしに――

〃

仏かねて

しろしめして

煩惱具足の凡夫と

おおせられたる

ことなれば

他力の悲願は

かくのごときの

われらが

ためなりけり〃

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

ああみ名

ああ

み名 み名 み名

ナムアミダブツと

言うみ名は

わたしの後生を

お引受けの

み名――

み名ただ一つの

おたすけと

知らせて救う

おたすけの

み名――

ああ み名 み名



久遠の友

諺に、旅は道連れ、世はなさけ、とか、袖振り合うも多生の縁とあるが、幾山河を越えてたどる人生の旅路に、孤影悄然でまぢもまたれもせぬ身ではたまったものではない。まことに人生の行路にあって心を許しあえるよい友に恵まれることは何ものにも換えがたい大きなよろこびである。

さて友にも色々ある、竹馬の友、同郷の友、同窓の友、職場の友、趣味の友、同志の集い、更に未見の友もあるが、時間を超えて古人を友とする人や、千載の下に知己をおく人々もある。なお行雲流水の旅にあって、自然を友とする人もあれば、植物や動物に友としての心のかよいを見出す人もある。

然し私はここで真の朋友、生死をこえた友情、久遠の友を中心として人生を省みたいと思う。一般に共に遊び、共に食い、共に行動すればすぐ友人と呼ぶが、こうした関係だけでは、好悪の感情や利害得失の如何によって集散、離

花田正夫

合は勝手次第で、あれも一時、これも一時のはかない交りに終る。ただ少年期の友誼は、互に無邪気で割合に利害打算のすくない純粋さがあって、何時までも心地よい思出として残り、ことにお互に人生の幾山河をすぎた年頃になると、その頃の友を非常になつかしみ合うようになるが、これもそれ以上には出られない。遠ざかればうとんじ、離れると忘れて行き、死のとばりの彼方に消えて行く。

○ 清沢満之師は、真の朋友について次のように述べていら

れる。  
世間に種々な縁によって朋友が出来るが、ただ有限で不完全な縁で結ばれたものは、有為転変をまぬがれない。真の朋友は、絶対無限の他力を信ずるといふ宗教的根拠に立たねばならぬ。

又、その特徴として、絶対無限の他力によって心から満足し、独立独歩するもの同志は、お互に済むとか、済ま

ぬ、或は友誼にそむくとか、そむかぬというような女々しいところはおこらぬものである。

又、朋友を求めるといふ必要はない。自分自身が眞の朋友としての資格、即ち宗教的根拠にしっかりと立っていればよい。元來朋友を求めるのは自分に足らぬところがあるので、その欠陥を補うためである。眞の宗教的信念に立てば、外物や他人に依頼せずに安心して行けるのである。

更に、朋友をえらぶと世間ではよく言うが、これは自分に対する利害を中心として、善友悪友と区別しているのだからある。宗教的信念の上からは、善悪ともに、順縁逆縁となつて、我等はその縁によつて自分が傷けられることはなく、むしろ修養の一端になるものである、だから朋友をえらぶことは無用である。

○ 大体、このように述べていられる。

さて絶対無限の宗教的根拠に立つことが一番大切なことであるが、その道を御自身の体験の上から近角常観先生は大要次のように「宗教的同朋」の題で述べられている。

人と人と出会う時、自然に心と心が交流するが、それは五分と五分である。こちらがよく思うと相手もよく思い、こちらが悪く思うと相手も同様に思うものである。その時善の力が強ければ相手を善に引き入れることが出来るが、

と絶讃されている。(信仰余瀝、懺悔録)

池山栄吉先生が或時「自分は学問も、名譽も、財産もないがひそかに誇りとさえ思っていることは、友人を多く恵まれていふことである」と微笑をもつて語られた。

先生が友人とよろこばれたのは、もとより仏縁に結ばれた友であつた。先生をおたずねする仲間に、青年学徒が多かつたが、教師や医師、或は有名無名の篤信者があつた。

御伺いすると、深くお感じになつたことを諄々とお話し下さつたが、機縁が熟さぬため聞きながすことも多かつたけれど、「耳にだけ入れておくれ、決して信仰上の言葉は空しくなることはない。筈に傷をつけるようなもので、その時に目立たなくても大きく竹と成長した時、大きく膨まされるものだから」と、心田に仏種を蒔いて下さつて、未来にしっかりと結ばれる信の友の出現に確信をもつて居られて、悪あがきのない悠揚さがあつた。

○ 私はこちらに、他山の石、もつて我が石を磨くべしとあるが、キリスト教者の友情論を引用しよう。

先ず、スイスの思想家で、教授、国会議員、判事の要職をもつていたヒルティの説をのべる。彼によると眞の友情はいつも神の大きな賜物にほかならない。神によつて招來

悪の力が強いと先方を悪に引きおとしてしまふ。さて實際生活はどうかというに、人はいざ知らず自分自身は、いつも善に勝ち抜くことが出来ないで、いつも悪に負けてしまふ、そうなれば自分の周囲の人を悪へおとしてばかりいるのである。それは限りある身にはどうにもならぬことである。かといつて仕方がないとほつておくことは出来ず、遂に大煩悶におちた。

そこで、このどうにもならぬ身を理解して飽くまでも捨てないといふ人を求めて、友をたずね、親に求めたが、結局苦しいばかりであつた。大煩悶の時大病になり入院し、九死に一生を得て通院する途上で、晴れわたつた秋空を仰いだ途端に、仏こそその方であつたと知らされた。仏はこゝろした身をかねてお見抜き下さつて、たとえ自分がその人の親切をこぼめばこぼむほど憐れみ、その人に反抗して打とうとするようになって、なお涙をもつて向つて下さる友であつた。その仏の眞実心がとどいた時、闇の心に光りが射し、その友情の篤いのに罪の塊りの身もとかされた、実に仏陀こそ最大の良友である。

かえりみて宗教的同朋とはこの仏縁に結ばれた自然の友であつて、仏陀から頂いた友である、親鸞聖人は御同朋御同行とかしづいて下さり、積尊は、わが親友(しんぬ)と呼んで下さるのも単なる讃辞ではない、

された友情は生涯やむことなく、死すらそれを決して完全に打ち切ることは出来ない。だから友人がたとえ死んでもその友情や心の通いは不死であるから永遠に続くのである。

次に、新渡戸博士が一高の校長を七年せられて退任の時キリスト教青年会の送別会の挨拶に「吾輩は札幌の学校に行つたが、もし東京に止まっていたら今頃は高位高官にいついて、人の前に大きな顔をして出られたかもしれぬが、一人でいる時は何となく不安で小さくなつていなければならぬ身であつたと思う。札幌に行ったので人の前では小さくなつていても一人でいる時は何の怖れるものもなく、ただ拜すべきものを拜するほか、何者の前にも屈するに恵まれた。これは一生涯の友人であり、むしろ永遠の友人である。吾輩が愛唱しているウーランドの人生の渡場という詩がある、それを披露しよう、朗々と暗誦された。それはウーランドがラインの支流のネッケル川を渡つた時の詩であつて、そのあたりの山川や自然は昔のままであるが、昔二人の友人と共に、三人で乗つたこの渡船の上には今日は自分一人しか居ない。二人のうち一人は既に穩かな老死を遂げ、もう一人はまだ若い生命を自由戦争に従軍して戦場の花と散らしてしまつた。しかし今自分には二

人ながらまだ生きていて、靈と靈とで今もなお話し合い、現に今一緒に渡りつつあるように思われる。そう思っているうちに船は向う岸に着いた、そこで船頭に三人分の渡賃を支払って立ち去った、という内容である、そこに永遠の友の面影がある」と讃えられた。又、新旧校長の全校の歓迎会の席で友情と知己について次のように述べられた。「うつるとは月も思わず、うつすとは水も思わぬ広沢の池、という古歌があるが、知らず識らずの間に自然に心と心が互に通いあう、このような知己が唯一人でも得られたらそれ以外に何の望むところもない。吾輩が死んだらその翌日から世間の人々から忘れられてしまうだろうと信じているが、もしも死後十年にして吾輩の著書を読んでもくれる人があったら、吾輩は墓の中で大声をあげて笑うであろう。更に二十年にして読んでくれる人が一人でもあったら墓からとび出して躍ろうと思っている云云」と感銘深い話をせられた。

次に、無教会主義のキリスト者の内村鑑三氏の書に「自分は色々の人と接して来たが、あれも一時、これも一時とみんな消えていった。ただ共に聖書を読み、共に道を通じた友達だけが、いつまでも変らぬ友情を持つことが出来た」とあったのが深く心に刻まれている。

がて「一人居て喜ばば二人と思ふべし……その一人は親鸞なり」と永劫かけて何処でも御一緒して下さいのである。

法然上人が四国に御流適のみぎり「たとえ肩を並べ、膝をくむといえども、念仏をこととしない人は源空にうとい」と云われ、お別れを悲しむ人々に「露の身はここかしこにて消えぬとも、ここはおなじ花のうてなぞ」と書きのこされている。その後、御示寂を前にお弟子が「古来の先徳はみな遺跡がありますのに、上人には一字の建立もありません。御廟所は何処に致しましょうか」とおたずねした時、「たとえ賤が苦屋であろうとも、念仏の声のするところはみなわが遺跡であるから、遺跡は諸州にある」と仰言つて、一処に廟所など造る必要はないとまで注意せられたのは、心を法界に遊ばされた上人の德音である。

さて私共のような、智慧の眼も、行の足もない身も幸によき人の仰せに導びかれて、お念仏の中に、過去の諸聖はもとよりのこと、有縁の恩師や善友がすでに浄土にかえられたが、何時でも何処でも、また何をしようとも、いつも御一緒して下さい、心賑やかに心と心の交流をさせていたでいて、恵まれた日々を送らせて貰っている。この喜びは、地上にあって地上を超えた、浄土から与えられるよるこびである。

以上、沢山の先生方の宗教的友情について紹介したが、その一番大切な点は、絶対真実なお力によって一人一人が信念の確立を得て、そこに大満足し、独立独歩し、そこから互に利用するなど云う不純な感情からでなしに、自然に心の通い合う友が恵まれる。その心の通いは時と所をこえて、遠い昔の人であれ、何百里離れて住む未見の人であれ、又環境、性格、仕事が違っていても、それにきまづけられることはないのである。

唯信鈔に「今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来生さとのまへの縁を結ばんとなり。われおくれなば人に導びかれ、われさきだたば人を導びかん。生々に善友となり、互に仏道を修せしめ、世々に知識として共に迷執をたたん」とあるのは、すべての念仏者の願いである。

我々が親子、兄弟、夫婦、友人、師弟と親しんで居てもみなほかない睦びで、離れ離れになってしまふ。幸にも今生だけでなく来世までも心の通う友を恵まれる時、仮の世、夢の世に永劫の喜びの光りが射してきて、はかない世がそのままにありがたい世と転じ人間に生れた喜びがある。

何よりも大切なことは自分自身の信念の樹立である、そこは飽くまでも一人しのぎの道である。聖人が「弥陀五劫思惟の願……ひとえに親鸞一人がため」と信受せられ、や

恋しくば南無阿弥陀仏をとのうべし われも六字のうち  
ちにごそすめ

とのお呼びかけは、尽未来際かけて、いつも生き生きと伝承されて行くことであろう。そのお念仏の中に永遠の友がつどいあい、むつびあって俱会一処の浄土の旅をたどることが出来るのである。

私共は昔、音は空気の振動で伝わり、光はエーテルの波動によってつたわるとなつたが、絶対無限のお力によって、永遠の友との心と心との交流が保持される、この友は努力してつくった友情でなく、大いなる力によって恵まれた友である、そこにほのかに浄土還来の観音菩薩や勢至菩薩の勝友（しょうう）としての片鱗を仰ぐことが出来る。

同じ世におなじ仏のむねに生くる久遠の友を恋ひてさ  
すらう

とは、かつて福島政雄先生が歌歎せられたが、私には忘れ難いものである。又住田講師は、

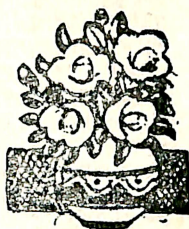
連れ多き 浄土の旅や 春の風  
と、晩年によるこぼれている。池山先生は

ひとり居て よろこぶ声や 明けやすき  
と意味をもらされているが、一人居るまんま賑やか、多

勢居るまんま一人の静寂な妙境がお二人の句にうかがわれる。こうした御信境のうちに、永遠の友の交誼がありありと感知せられる。

昭和五〇年九月 初秋の日。

あとがき



前号に十月二十五日と間違いましたが、十月二十六日の京都の「道会」が近づきましたので、池山先生の『絶対他力』から信後雑感を掲げました。私が信の旅の道しるべとさせて頂いておりますものであります。又例年お参会下さった松本解雄様へのび、旧稿から「一つの告白」を頂きました、浄土から微笑されながら、うなずいて下さると思えます。

白井先生追慕会は九月二十八日(日)京都東山の円山幼稚園で午後二時から催されました私は当日お伺い出来ませんでした、一期一会の文字通り感銘深いおつどいだったと遙察申し上げていました。最近に白井成道様が六高、京大の御出身とお聞きし、同窓の方だったのに今までうっかりしておりましたことをおわびし、すでに白井先生を介してお念仏の縁を結んで下さっていたことをありがたく思いました。

高千穂師の「いのちのよろこび」は感銘

深く頂きました御芳情を謝しております、木村さんは腎臓が悪いので、食養生と静居を守っていられる由、この秋に自愛自重を祈念しております。私はこの八月は遠来の方々に御無礼を続けて、身を縮めて暑さをしのぎました。かって行きずりの老人から「あんたは立派な身体を親から貰ったのう、自分で悪くしないで大切にしない」と、若い日、肺疾が恢復して山道を散歩している時、突然注意をうけたことがあります、忘れられぬことの一つです。

最近、友情のありがたさをしみじみ一人居て味いながら一文を草しました。評論家の河盛好蔵氏は「絶えず新しい友人と交って元気で積極的な仕事をする人と、世間的な榮達などには影響を受けない古い友人を多く持つ幸福な型の人がある」と云っているが、ある年齢をすぎると気心を知り抜いた、何でも言える古い、友がありがたくなるものであります、まして絶対なるお方に結ばれた永遠の友は、七つの宝に数えられるものであります。

京都一国会御案内

時 十月二十六日(日)午後一時  
 所 京都市右京区山田開町、浄住寺  
 市バス、京都駅より苦寺終点下車  
 新京阪、桂乗り換え上桂下車

△御案内▽

○一国会例会。毎月、第一、二、三日曜、午後一時半。南区駈上町二の八八、一国会館。  
 市バス、新郊通り一丁目下車。地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小椋町二丁目四番地。  
 市バス、北山町、又は御器所通り下車。

定価 半年 五〇〇円 (送共)  
 一年 一〇〇〇円 (送共)

編集・発行人 花田 正夫  
 電話八二一局七〇三七番  
 印刷 坂部 光雄  
 名古屋市南区駈上町二ノ八八  
 発行所 慈光社  
 振替口座 名古屋一〇四七〇番  
 郵便番号 四五七